

福沢諭吉の女性論

小 泉 仰

現代日本においてすでに女性学会が三つ出来ており、それぞれの学会は盛んに女性論を論議しており、いわゆる日本のフェミニスト運動も、まだ多くの課題を残しているとは言え、かなり定着してきたといえよう。さらに一九九五年秋には北京において女性に関する国際会議が開かれたこともあり、アジアでも女性をめぐる論議は国際的な広がりを持つてきたのである。

ところがこういう学会ができて、そこで女性論を論じるようになったのは、実は戦後のことである。こうした現代の女性論に通じるような日本における女性論の先駆者は、一体誰だったのか、特に明治維新になってから日本で初めて女性の権利を守ることを主張した女性論を論じ出したのは誰か、その女性論の内容はどんなものだったのか、と問うてみると、それは福沢諭吉であり、近代日本において現代にも通じる一番最初の女性論の内容は、福沢諭吉の女性論に他ならないと言いうことができる。そこで日本における女性論の先駆であった福沢諭吉

の女性論を本論のテーマに致したいと思う。

福沢諭吉の女性論の時代区分

さて、『福沢諭吉全集』の全二十一巻を見通して、彼が女性論を論じた時期の区分を考えると、大ざっぱに言って三期に分けてみることができる。しかも三期の間にそれぞれ七年間ほど、彼が女性論を殆ど論じない時期があるので、大変区分しやすいのである。

第一期は、幕末の慶応二年（一八六六）に出版した『西洋事情初編』⁽²⁾と慶応三年（一八六七）に出版した『西洋事情外編』⁽³⁾を始めとし、『中津留別』⁽⁴⁾から明治九年八月（一八七六）の『学問のすゝめ 一五編』⁽⁵⁾までである。但し『西洋事情初編』及び『西洋事情外編』という本は、福沢自身の著書というよりは、William & Robert Chambers、チェムバーズ兄弟が編集した Chambers' Educational Course 及び Moral Class Book を土台に翻案した本であるから、福沢自身の著作ではない。しかし福

沢がその内容に共鳴して翻案したものであり、その後の福沢の著作の根底にある思想を幾つか発見することができる重要な著作である。また同時にこの本は、明治政府も維新期の政策決定の第一級の資料として採用しており、さらに小学校教育の教科書としても採用されていたという、当時大変大きな影響力を持った著書であった。

こうした『西洋事情』を前提にしながら彼自身の思想を展開した最初の本は『中津留別の書』であり、これは明治三年(一八七〇)に書かれている。そこで、福沢諭吉の女性論の第一期は、明治三年の『中津留別の書』から始まって、『学問のすゝめ 八編』(明治七年四月、一八七四)と『二三編』(明治七年十二月、一八七四)及び『一五編』(明治九年八月、一八七六)を含んだ時期の女性論であるということになる。この頃の彼の女性論は、福沢が三十五歳から四十一歳に至る、いわば著作年齢からして三十台から四十台にかけての若い力を存分に発揮して、これから一層昇り詰めていこうとする勢いを示している作品群中に展開されている論議である。

第一期から七年間を置いて、第二期は、明治十六年(一八八二)から明治二十一年(一八八八)までの時期である。丁度、福沢が四十八歳から五十一歳位までのまさに油の乗り切った時期の作品群である。この時期には、彼は明治十六年の「婦女孝行論」⁽¹⁰⁾および「婦女孝行餘論」⁽¹¹⁾を書いて後、明治十八年(一八八五)には福沢の女性論としては最も有名な『日本婦人論』⁽¹²⁾、『日本婦人論後編』⁽¹³⁾、『品行論』⁽¹⁴⁾といった著作を立て続けに書き続けたのである。さらに明治十九年(一八八六)には、福

沢は『男女交際論』⁽¹⁵⁾『男女交際餘論』⁽¹⁶⁾、『婚姻早晚論』⁽¹⁷⁾、さらに明治二十一年(一八八八)に『日本男子論』⁽¹⁸⁾を書いている。この第二期は、福沢が最も代表的な女性論を集中して書き続けた時期であったということが出来る。

福沢女性論の第三期は、第二期からの七年間、主要な女性論を執筆しなかった七年間を除いて、明治二十八年から始まり、明治三十二年に終わっている。この時期は、福沢が六十歳から六十四歳の頃である。福沢は明治三十四年二月三日(一九〇一)に六十六歳で亡くなっているから、この時期の著作は、それこそ彼の晩年期の作品である。この時期に福沢は、明治二十八年(一八九五)の『福翁百話』⁽¹⁹⁾を時事新報の社説において書き続けるが、この本の中に女性論を展開している。また明治三十一年(一八九八)に『福沢先生浮世談』⁽²⁰⁾を書いて、老齡の立場で洒落な論調を用いて、女性論を展開している。さらに明治三十二年(一九九九)に『女大學評論』⁽²¹⁾と『新女大學』⁽²²⁾といった最晩年期の女性論を発表している。そこで、以上の三期に亘って、福沢諭吉がどのような女性論を展開していったかを明らかにすることにしよう。

第一期の福沢諭吉の女性論の時代背景

さて第一期の福沢の時代は、先に述べたように幕末一八六六年から明治三年(一八七〇)さらには明治九年(一八七六)までという幕末・明治初期の時代である。

この時代の日本女性の社会的地位は、現在とは天と地のように違っ

ていた。当時は徳川時代の男尊女卑の社会的差別をなお濃厚に維持し続けていた時代である。しかも男尊女卑の制度は、日本の儒学思想によって公けに正当化され、誰からも批判されることのない正しい制度とみなされていた。例えば、後に福沢が攻撃の的にする有名な本があるが、それは当時、貝原益軒が書いたと言われていた『女大學』⁽²⁰⁾である。この本は明治時代になっても、まだ徳川時代に引き続いて影響力を持ち続け、女性教育の基準とみなされていた。実をいうと、この本は貝原益軒が書いた『和俗童子訓』⁽²³⁾という本を下敷にして書き上げた大変短いもので、現在誰が書いたか分からないが、簡潔に女性への教訓を盛り込んだ本である。それは女性への差別意識を濃厚に含み、女性の権利を全く認めない女子三従七去の教えを説く封建思想を如実に表明した教訓書である。

明治初期はまだこのような本が幅をきかしていた時代であり、言い換えれば、女性の権利が大変希薄であった時代である。そんな時代に福沢が男女平等を唱えたというのは、まさに氣違い沙汰であったといっても過言ではない。

福沢の同時代人で、中村敬宇という人物がいる。彼は明治時代にあって女性の向上を計ることの重要性を論じた数少ない人の一人であった。この人は幕末には官学の中心であった徳川幕府の儒学の学校、昌平黉の一等教授であり、幕府が派遣した留学生の取締役として一八六六年から一八六八年までは二年間ロンドンに留学した人である。明治維新时期にはサムエル・スマイルズの“Self-Help”を訳して、当

時のベストセラーになった『西国立志編』⁽²⁴⁾（明治四）を出版したり、J. S. Millの『自由之理』⁽²⁵⁾（明治五）を訳した大変有名な人物である。福沢や森有礼と共に明六社を組織して啓蒙運動に活躍し、後には東京大学漢文学教授を勤め、さらに貴族院勅撰議員を勤めた人である。⁽²⁶⁾

彼は明治八年（一八七五）には女性の教育が極めて大切であり、男性と同じ教養を身につけるべきであると主張し、「善良ナル母ヲ造ルノ論」⁽²⁷⁾という小論を書いた。さらに彼の経営した私塾の同人社においては男女共学をも行っている。その意味では女性の地位向上に大変貢献した数少ない人物の一人であった。しかしこの論文では、男女同権について「それはさて置き」と、論議をややむやにしている。

当時の有名な明治政府の官僚でしかも男女平等の理念を実践した人というと、森有礼がいる。彼は明治政府の高級官僚としては特別例外的な存在であった。彼は幕末に薩摩藩から派遣されて英国留学をしているが、その最中にThomas Lake Harris（一八三三—一九〇六）という人物の主張した基督教に共鳴している。

このハリスという人物は、英国生まれであるが、五歳のときにアメリカに移住して、ユニテリアニズムの影響の強いアメリカン・ユニヴァーサリスト教会系の牧師となった。その後、彼は神秘的な霊媒体験を基礎に特殊の新興基督教団を創立し、信仰者集団とともに一種の理想主義的原始共産制度（英語でFamily Partnership）を敷いて自分はFatherとしてニューヨークのブロクトンという所に葡萄園を始め、さらにアメリカに移って農園を上記の思想をもって経営していた。森有

礼は、このハリス教団に入団して一年ちょっとアメリカで過したものである（一八六七—⁽²⁸⁾）。

ハリス教団が通常の教会における洗礼を施行していたかどうかはわからないので、森もここで洗礼を受けたかどうかは不明である。明治天皇の侍講であり、また教育勅語の發布を促進するためにかなり活躍した元田永孚は、森のことを基督教徒だといっているが、洗礼を受けたかどうかの真偽の程はわからない⁽²⁹⁾。

しかし帰国後の森は、自分が基督教の団体に参加したことなど、一言も語っていないし、自分を基督教徒だと公言したこともない。とはいえ森有礼は、基督教の重要な倫理であった一夫一婦制を守っていた珍しい人物であった。

この森有礼を除けば、明治新政府の高級官僚たちは、一夫一婦制を守ろうとした人は殆どなく、何人も妾を持つ人が多かった。当時の自由民権論者たちでさえ、芸者や娼妓と戯れることを女性の権利の侵害だとは思っても見なかったのである。それゆえ、彼らのいう自由民権とは男性だけの民権論であって、女性の人權を口にするものはほとんどいなかったのである。

明治初期の時代日本にとってすべての社会制度、政治制度、経済制度のモデルと見られた英国でも、英国女性の置かれていた事情は、日本とは違うとはいえ夫婦の権利といった点について見ると、とても男女同権とはいえない状態であった。例えば、福沢諭吉がよく読んでいて自分の女性論の基礎とみなしていた J・S・ミルの『The Subjec-

tion of Women』という本がある。この本は、一八六九年つまり明治二年に出版されたが、この本によると、英国でも女性は慣習的だけでなく法律的にも男性の下に服従せざるを得ない状況に置かれていた。ミルはこの本の中で、当時の英国の夫婦間の関係を次のように言っている。

「夫の利益になることを除いては、妻は財産を得ることはできない。財産が相続によって彼女のものに成った途端、事実上、夫のものになる。……妻は夫が自分を憎んでいるのを知っていても、夫の日常の楽しみとして妻を痛めつけるためであっても——夫は人間の品位を最低に卑しめること、つまり妻を……動物的機能の道具にしてしまふことを要求できるし、力尽くでそんな行為を強制できたのである。」⁽³⁰⁾

当時の先進国の英国でさえ、女性には男性に対して不平等の状況に置かれていた。いわんや封建時代からやっと目覚めて、新しい時代に這い出たばかりの日本の十九世紀半ばの時代であるから、日本の女性の社会的地位は、極めて低かった。そんな時代に福沢が男女同権論を展開したから、これは驚くべき見解であって、当時としては時期尚早の見解というべきであろう。

ところで、福沢諭吉が自分の見解として公けに女性論を書き始めたのは、上記のように明治三年（一八七〇）の『中津留別書』からであるが、福沢が女性問題に関心を抱き始めたのは、明治三年よりもずっと早い時期であったようである。たとえば、明治十五年（一八八二）に福沢が創立した時事新報社のある記者は、福沢に親しく接していたが、

福沢が話をしてくれたものをここに発表すると断って、明治三十二年四月十四日（一八九九）の『時事新報』の記事として「福沢先生の女学論発表の次第」という小論を投稿している。この小論によれば、福沢は中津藩の命令により江戸に上京し、安政元年（一八五八）に慶應義塾という蘭学塾を鉄砲洲に創立したが、この頃すでに福沢は女性論への関心を持っていたと指摘している。今その記事を以下に引用してみよう。

「先生は夙に此一事に心を籠め、二十五歳の年、初めて江戸に出でたる以来、ときどき貝原益軒の女大學を繙き、自ら略評を記したるもの幾冊の多きに及べる程にて、其の復稿は既に幾十年の昔に成りたれども、当時の社会を見れば、世間一般の気風兎角落付かず、恰も物に狂する如くにして、真面目に女学論など唱ふるも、耳を傾けて静かに之を聞くもの有りや無しや、甚だ覚束なき有様なるにぞ、只これを心に蓄ふるのみにして、容易に発せず、以て時機の到来を待ちたりし……」⁽³⁰⁾

先に述べたように、福沢が江戸に出てきたのは一八五八年、つまり安政五年で鉄砲洲に蘭学を教える福沢塾を創立した年であり、この年が慶應義塾創立の年とされる。これは彼が満二十三歳のときで、この歳から、女性問題が大変大事であると考えていたことになる。しかし当時の情勢が女性問題を論じるにはあまりにも早すぎた嫌いがあると判断して、彼は自分の意見を全く発表しなかった。しかし、特に貝原益軒の『女大學』に対する批判原稿を書いて筐底深く仕舞っていたというのである。

何故彼が女性問題に関心を持っていたかという点、一つには彼の家庭の事情を挙げることができる。彼が意識を持ち始めた頃には父親の百助は亡くなっており、残された家族は母一人、兄一人、さらに姉が三人であり、福沢諭吉は末っ子であった。この兄は父が亡くなった後を継いで大阪に行つて、中津藩の蔵屋敷に務めに出た後では、福沢の中津の家庭では母一人、姉が三人もいて、家庭は年上の女ばかりの四人であり、一番歳下の福沢は、年上の女ばかりの環境で育つたわけで、女性の力が身に沁みてよく分かつていたといつてもよい。福沢の女性論は、二十歳台からの見解であつたといえるが、その素地は女性優位の彼の家庭環境が影響したということができそうである。

『西洋事情』の中の男女論

さて一八六六年（慶応二）に福沢は『西洋事情初編』を出版しているが、この本はすでに述べたように、福沢が非常に共鳴した本であり、後の彼自身の著書にも残っている思想を見つけることができる。特に巻之二には、福沢は、アメリカの独立宣言を訳しているのが見られる。英語では次のようにいわれる文章である。“We hold these Truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable rights.” 福沢はこれを次のように訳している。

「天の人を生ずるは億兆皆同一轍にて、之に付与するに動かす可らざるの通義を以てす（選一・一二九頁）⁽³¹⁾」

と訳している。独立宣言は人間すべてには平等の権理と通義があることを確認している。この宣言から後の『学問のすゝめ』冒頭の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといへり」⁽³²⁾という名文句が生まれたことが今日認められている。人間がすべて平等の権理通義を持つているという理念は、当然のことであるが、男女平等の理想を含んでいる。

しかし、福沢自身も『旧藩情』⁽³³⁾で指摘しているように、士農工商とか武士仲間でも上士と下士との間の上下差別の厳しいカーストが崩れていない幕末の時代のことであるから、いくら福沢が男女平等を叫んでも受け入れられる可能性はないと判断していた。そこで彼は『西洋事情』という翻案を除いては、全く男女の問題に触れなかったのである。

『中津留別の書』

さて、福沢自身の言葉で語った女性論の最初は、明治三年つまり一八七〇年の『中津留別の書』という短い文章である。これは大変重要な本である。なぜなら、この中で夫婦の問題を論じながら、福沢は、初めて家庭と社会の中の女性の地位について当時としては誠に突出した意見を展開するからである。今その一部を引用してみると、次の通りである。

「人倫の大本は夫婦なり。夫婦ありて後、親子あり、兄弟姉妹あり。天の人を生ずるや、開闢の始、一男一女なるべし。……又男といひ女といひ、等しく天地間の一人にて軽重の別あるべき理なし」⁽³⁴⁾

福沢はここで夫婦の倫理がすべての倫理の基礎であり、しかも天地の間で男女は全く平等であると主張している。しかも、この短い論文には、もう一つの大変重要な主張が含まれている。それは「夫婦別あり」⁽³⁵⁾という儒教の主張について、福沢が意識的に全く新しい解釈を提出したことである。

夫婦別ありとは、夫が外の仕事を担当し、妻が家の中の仕事を担当するというのが、通常これまでの解釈であった。これに対して、福沢は次のような全く新しい解釈を出している。

「別ありとは、分け隔てありといふことにはあるまじ。夫婦の間は情こそある可きなり。他人らしく分け隔てありてはとも家は治りがたし。されば別とは区別の義にて、此男女は此夫婦、彼男女は彼夫婦と、二人づ、区別正しく定まるといふ義なるべし」⁽³⁶⁾

言い換えれば、夫婦二人が社会の独立単位であり、他の夫婦とは別の存在とみなさなければならないというのである。この主張には、二つの大変重要な含みがある。一つは、福沢が日本の従来の慣習であった夫一人に大勢の妾を抱えることが不合理であることを、この「夫婦別あり」という儒教の命題に対して福沢独特の解釈を施すことによって指摘したことである。つまり夫婦は一セットであって、この間に妾があつてはならないということである。

この命題はもう一つの含みを持っている。それは、この解釈の少し後で父母と子供の関係を福沢が論じており、子供が一人前になったら「父母はこれを棄て、顧みず、独立の活計を営ましめ、其好む所に行

き、其欲する事を為さしめて可なり……前に云へる棄て、顧みずとは、父子の間柄にても其独立自由を妨げざるの趣意のみ」という文章があることと関連している。言い換えれば、親夫婦と子供夫婦とは独立であり、独立体として区別されなければならないという含みを「夫婦別有り」の命題が持っている。それゆえ、親夫婦は親だからといって、子供夫婦の権理通義を犯してはならないわけである。こうした含みを考えると、福沢の夫婦関係は、二十世紀後半の日本社会の典型的な親子夫婦関係を描いたことになる。

『学問のすゝめ』の中の女性論

さて、『中津留別の書』を書いた二年後の明治五年から明治九年まで、福沢の主著の一つ『学問のすゝめ』の各編が次々と出版されている。この本の八編は、明治七年四月（一八七四）に出ているが、ここで福沢は次のような貝原益軒の『女大學』批判を展開している。

「然るに家の内にては公然と人を恥しめ、嘗てこれを咎る者なきは何ぞや。女大學と云ふ書に、夫人に三従の道あり、稚き時は父母に従ひ、嫁る時は夫に従ひ、老ては子に従ふ可しと云へり。稚き時に父母に従ふは尤なれども、嫁て夫に従ふとは如何にしてこれに従ふこととなるや、其従ふ様を問はざる可らず。女大學の文に拠れば、亭主は酒を飲み女郎に耽り妻を罵り子を叱て放蕩淫乱を尽すも、婦人はこれに従ひ、この淫夫を天の如く敬ひ尊み顔色を和はらげ悦ばしき言葉にてこれを異見す可しとのみありて、其先きの始末をば記さず。されば此教の趣意は、淫夫にても姦夫にても既に己が夫と約束した

る上は、如何なる恥辱を蒙るもこれに従はざるを得ず。唯心にも思はぬ顔色を作りて諫るの権義あるのみ。其諫に従ふと従はざるとは淫夫の心次第にて、即ち淫夫の心はこれを天命と思ふより外に手段あることなし……腕の力を本にして男女上下の名文を立たる教なる可し。」⁽³⁸⁾

理不尽な夫に対しても、妻は全く服従だけを要求されている不合理な教えとして、福沢は『女大學』を批判する。さらに男女は同数に生まれてきたのに、男が妾を二、三人を持つというのは、天理に反しており、禽獸と同じだと非難する。こうした妻と妾が一緒に住む家は、家畜小屋と同じだと批判するのである。⁽³⁹⁾

この批判は恐らく勝海舟を含めた当時の明治政府の顯官たちが妻と妾を同じ家に住ませたことを暗に批判しているように思われる。さらに妾を養うのは、家の跡取りを得るためであるという弁護論があるが、福沢はこうした弁護論自体が天理に悖ることであって、そういうことを弁護した孟子でも孔子でも遠慮せずに、罪人と断定してよいと主張した。⁽⁴⁰⁾

また『学問のすゝめ 一三編』は、明治七年十二月（一八七四）に出版されているが、ここでは『論語・陽貨第一七』にある「女子と小人は養ひ難し」という文章を、福沢は「女子と小人とは近づけ難し」と言い換えて論じている。

こうした儒教的発言を批判し、これは孔子自身が女子に行動の自由を与えず、窮屈な生活規範の中に押さえ付けていたせいであり、女子

の心に「怨望」が生まれたのだといい、孔子は自分で女子を締め付ける倫理を与えたくせに、自分で困っているだけだと痛烈に批判している。⁽⁴¹⁾こうした儒教倫理批判は第一期、第二期、第三期を通じて、共通に福沢が行っていたことであつた。

ミルの女性論

すでに J・S・ミルについては、先に少し述べておいたが、福沢は『学問のすゝめ 一五編』でジョン・スチュアート・ミルの『婦人論』のことにふれて、「夫婦別有り」という定説を批判し、次のようにいつている。

「今の人事に於て男子は外を務め、婦人は内を治るとて、其關係殆ど天然なるが如くなれども、「スチュアルト・ミル」は婦人論を著して、万古一定、動かす可らざるの此習慣を破らんことを試みたり。」⁽⁴²⁾

福沢はこの男女不平等の社会慣習ほど人間に天然に備わっている自由平等の権理通義を破るものはないとして、この慣習を正統化しようとした儒教を徹底的に批判し、これを改革しようとした。このことに関連して、福沢がミルの女性論を引用したところから分かるように、福沢はミルから大きな影響を受けている。

ところで、ミルの女性論には二冊の本がある。すでに述べたように、福沢が言ったミルの婦人論とは、“The Subjection of Women,” 1869 のことである。ミルの女性論は、⁽⁴³⁾もう一冊あり、それは“The Enfranchisement of Women,” 1851 である。これは最初 “Dissertations and Discus-

sions,” 1859-1875 といい、いわば『ミル論文集』の中に収録された論文である。実はこの論文はミルの妻の Harriet Taylor が書いたものだという主張があり、それに対して、いやそうではない、やはりミルが書いたのだといった論争がある。⁽⁴⁵⁾その当否は未だ決着がついていないので、この本はここでは取り扱わないことにする。

福沢が読んだ本は明治二年（一八六九）に公刊された『女性の服従』である。すでに述べたように、ミルは英国でも男女不平等の厳しい慣習が濃厚に存在していた時代に女性問題を取り上げ、英国におけるフェミニスト運動のきっかけを作った人である。彼の周辺には Mrs. Harriet Taylor, 義理の娘 Helen Taylor, Mrs. P. A. Taylor, Miss. Cobbe, Mrs. Stanfield などが集まり、女性参政権運動の原点が形成された。十九世紀英国の女性運動の先駆者たちは、ミル理論を中心にして集合し、このグループから英国の女性運動が発展していくのである。⁽⁴⁶⁾

ミルは優れた女性が単なる社会の伝統や慣習のために虐げられることこそ、不合理であるとし、人間性の発展という尺度から見ても、優れた人間は、男女に関係なく、平等に尊重さるべきだと主張した。ミルは特に優秀な男女が中産階級に多く発見されると考え、これに対して、この尺度の上で未発達な人間は、男女を問わずに軽蔑すべき対象であり、こうした劣った男女が当時の労働者階級に見られるというのである。さらに優れた男女なら、男女を問わずにどんな職業であれ、そうした職業につく自由を与えて、彼らの能力を発揮させるべきだと主張している。⁽⁴⁷⁾この点は、社会全体の民度が日本に比べて数段高かった当

時の英国に生きたミルと、明治維新を経てまだ新しい秩序が殆ど成立していなかった時代に生きた福沢との相違である。職業上の男女平等という理念は、女性論に関して先駆的思想家であった福沢諭吉でさえも、考え及ばなかったことであり、優れた女性が優れた男性と同じく、同等の職業の上でも平等に就職すべきだという主張を、福沢はしていない。

職業上の男女平等を主張した J・S・ミルは、妻の Mrs. Harriet Taylor の影響が非常に強かったからだということもできる。たとえば、Mrs. Harriet Taylor が亡くなった後、ミルは『自叙伝』の中で彼女への追慕の情を次のように述べて、彼女のミルへの情念の上の影響力の大きさを示唆している。

「最高水準の思索領域においても、日常生活の細々した実際上の関心事においても同じように、彼女の思考力は完全な道具であり、事態の核心と真髓に深く迫り、本質的な観念や原理を捉えていた。同じ様な回転の早さと正確さとが精神能力にも感情能力にも行き渡っていたから、彼女のような感情と想像力の才能を持っていれば、全く完璧な芸術家になっていたであろうし、彼女の火のように燃えてその上優しい魂とあの力強い雄弁のゆえに、彼女はきっと偉大な演説家になっていたであろう。また彼女の人間性についての深い知識と実際生活上の分別と賢明さからすれば、女性にもそういう経歴が開かれた時代なら、人類の統治者の内でも優秀な統治者になっていたであろう。」

自分の妻に対して、これほどの賛辞を呈することの出来たミルは、

一方で幸福な結婚生活を送った人だといえるが、他方で妻に支配されていた恐妻家であったとも言える。まただからこそ、英国でも男女不平等が当然であった十九世紀の時代に、ミルは優秀な女性についての女性論を書き上げたと言いうこともできる。

福沢の中産階級への期待

さらにミルが中産階級の中に優秀な男女が見いだされ点でも、福沢に影響があった。たとえば、福沢は十九世紀の日本では特に大切な階級が「ミヅルカラス」⁽⁴⁸⁾、つまり中産階級であるとし、中産階級の家庭の中での男女の社会慣習を問題にしていた。但し福沢は、十九世紀の日本には未だ中産階級は成立していなかったと判断しており、そこで、彼はやむを得ず当時の旧武士階級、豪農、儒者、医師、文人などを含めた士族階級をもつて中産階級と見立てようとした。⁽⁴⁹⁾ いわゆる士族階級をもつて高等教育を受ける資格のある青年を輩出する集団であるという見解を持っていたわけである。⁽⁵⁰⁾

一方、当時貧困階級からたくさん出てきた娼婦については、彼は同情を全く示しておらず、この問題の解決をあまり論じるようなこともしなかった。⁽⁵¹⁾ この点に、福沢の女性論の限界があるということができ

る。明治初期から中期に掛けての日本の独立と近代化を達成していくのに、何が一番大事か、この軽重前後を評価して最も重大な事柄をどのように選択すべきかを、十九世紀日本という時節と場所の中で苦闘し

ながら考えに考えていった福沢にとって、女性問題に関しては西洋の「中産階級」に該当するとみなされた日本の士族階級における男女平等を達成することが、十九世紀日本の先決問題であると見たわけである。

こうした福沢の視点は、物事の轻重を判定する上での眼識の確かさを示している。彼は、いわゆる士族の家庭で夫婦の平等が達成された暁には、士族階級の一家の独立が達成されるのであり、士族階級の一家の独立が達成されるなら、それがモデルとなり、日本の家全体の模範となって日本の家族全体を先導していくはずだと考えたわけである。

一国の独立を十九世紀の日本において最大の目的とみなしていた福沢は、まさに一家の独立を達成させるのに、士族階級の夫婦の平等の確立を通して夫婦が一对で独立し、独立体となった士族階級の夫婦が先導的な役割を果たして、日本全体を引っ張ることを期待した。こうして彼の教育の対象は、士族階級の子弟に絞られたのである。⁽³²⁾

二十世紀後半の今日の日本でも、福沢の意味での男女の平等と独立とが完全に達成されたとはいえない。しかし福沢の生きていた時代と比べるなら、相対的には男女の平等と独立とが、かなり達成されてきたといえることができるであろう。現代日本においても、中産階級が存在するかどうかは議論の余地があるが、それでも日本民族全体を見渡すと、財産は無いけれども、全国民の収入の位数の所に圧倒的多数の国民が集まっているといえることができる。こうした収入の位数に集まる階級を中間階級と呼んでみれば、日本人の圧倒的多数は、この中間階級であるといえることができる。

もし福沢論吉が現在生きていたらという事実に反する仮定をすることは、歴史家のすることではないが、もしそうした空想が許されるなら、彼は現在の中間階級の平等なる夫婦関係に大いに期待するであろうと思う。さらに現在福沢が生きていたら、彼は当然貧困階層出身と中産階級とを問うことなしに、出現する娼婦の問題を女性論の最優先の問題の一つにしたと思う。

第二期の福沢の女性論

さて、福沢が最も詳細且つ広範囲に女性問題を取り扱った時期は、明治十八年（一八八五）の『日本婦人論』⁽³³⁾から始まって、次々に女性論に関する著作を発表して行つた第二期である。そこで、この第二期の福沢の女性論を考えてみることにしよう。この時期の福沢の女性論に関して、今、福沢の取った二つの視点について考えることにする。

第一は、明治十八年代における日本女性の問題状況を福沢がどのようにに分析したかということである。もう一つは、そうした女性問題を前にして、彼がどのような対策を立てようとしたかということである。まず第一は福沢が当時の女性の問題状況をどのようにに分析したかである。『日本婦人論』によると、当時の日本女性は「何等の責任」も持たされていないのである。つまり女性の置かれた状況は、徳川時代とそれほど変わりはなく、「女子は三界に家なし」とされ、全く社会的責任から外された状態に置かれているという。⁽³⁴⁾責任を持つことが人間性の発達にとって緊要であるのに、こうした無責任の状態に放り

込まれた女性は権力も無く、独立もできない。これは女性の生まれつきの状態ではなく、人為的な女性操作の結果であり、女性に対する社会の圧制の結果であるというのである。

この無責任の状態に置かれることが、女性の人生を狂わせてしまったというわけである。福沢によれば、人生には三つの生の形態がある。それは「形体の生、智識の生、情感の生」⁽⁵⁵⁾、つまり体と、知識と情緒の三つの生活である。

これら三つの生活形態がバランスを保っていれば、次第に相互に助け合って人間は豊かな人間として育っていくことができるはずであるが、明治時代の女性は、社会の圧制により知識と形体の発達が著しく遅れ、情感の発達は比較的に進んではいても「情への食物たる快楽」が少なく、丁度飢えた状態だといっているのである。特に快楽を減少させしかも女性を害すること最も甚だしく且つ残酷な社会制度は、多妻制度 *polygamy* であるという。その上、男尊女卑の風習のため、夫が妻を伴うことが少なく、寡婦に再婚の機会を与えない結果、女性は「憂愁の内に鬱して心識過敏形体脆弱の禍を醸し、世々の遺伝女性の子に伝へ……人生の萎縮したる者甚だ多し」⁽⁵⁶⁾ ということになる。こうして福沢は女性の中にヒステリー、子宮病、神経病が増えていると診断し、日本人の体躯が弱小になった理由の一つは、女性に快楽の自由がないことだと断言している。日本人の体躯が弱小になることは日本国家の弱小に繋がる。逆に女性の解放は日本人の体躯を強化し、従ってまた国家の独立に貢献するというわけである。

一方、古代の日本人男女は、共に大変自由であったが、武士支配の時代、特に徳川時代になって儒教倫理が女性に対して厳しく律していき、ついに女性の自由を禁止してしまったというのである。

同じく明治十八年十一月二十日から十二月一日（一八八五）に亘って時事新報社に連載された『品行論』で、福沢はこうした男女不平等の社会体制とその変遷の分析を行い、こうした体制が戦国時代に始まったと指摘している。戦国時代の武士は戦争に明け暮れ各地を転々としながら性について自由奔放に振る舞い、福沢の言葉で「磊落無頓着の氣風」⁽⁵⁷⁾ を作りあげていった。

これに対して女性は男性の横暴を許して家庭を守ることに終始していった。ここから *private morality* つまり福沢の言葉で「内行」が「野蛮」になったというわけである。この氣風は徳川時代になって平和な時代に移行しても変わらずに残り、さらに明治時代になってもこの悪習が強く残存しているわけである。さらに加えて、儒教倫理がこの内行の中で最も大切な男女関係における不平等を積極的に擁護していると非難するのである。⁽⁵⁸⁾

福沢の女性問題解決策

こうした古代から明治時代に至るまでの女性問題の分析を土台として、彼は特に明治時代における女性問題解決策を、いろいろ提案している。そこで彼のユニークな提案を紹介しよう。

まず第一の女性問題解決策は、家の空名を廃止することである。家

の名を存続していくというだけの理由で、子供を産めないことが妻を離婚する理由になり、そうでなくても、家を継げる子供を産むために妻とは別の女性を妾として男が持つてもよいという慣習の根拠になっている。『日本婦人論』で次のような解決策を提案している。

「新婚以て新家庭を作ること数理の当然なりとして争ふ可らざるものならば、其新家庭の族名即ち苗字は、男子の族名のみを名乗る可らず、女子の族名のみを取る可らず、中間一種の新苗字を創造して至当ならん。例へば畠山の女と梶原の男と婚したらば山原なる新家庭と為り、其山原の男が伊東の女と婚すれば山東と為る等、即案なれども、事の実を表し出すの一法ならん。」

こうした新しい家の名を創造しようという提案は、現在二十世紀後半になってようやく家名に関する法律改正の問題として盛んに日本の新聞紙上で論じられているところであり、まだいづれとも決着せずに論議の最中である。そこでこれは福沢の見識の先進性を示すものだとということができる。

次に第二の女性問題解決策は、女性に責任を持たせることである。責任を持たせるには女性に財産を与えることが先決である。つまり財産を男女に平等に与えることで、女性はその財産を管理し運営していかなばならないから、必然的に責任を取らざるをえないのである。あるいはさらに徹底して不動産と公債は、すべて女子に限って相続させてもよいと言っている。彼は此の点を次のように言う。

「父母の遺産を子に伝るに、不動産は必ず女子に譲るものと定め、

女子の記名に非ざれば地面家屋等の所有を許さず、また公債証書の記名なども、必ず女子に限るとするも一法ならん」⁽⁶⁾

こうして財産の運営を女子の委ねることによって、女性は社会において責任ある行動習慣を獲得していくと言う。

第三の女性問題解決策は、離婚の権利を男女平等にすべきだという主張である。⁽⁶⁾日本では財産の原理の平等と婚姻の権利の平等を法的に定めれば、女性は男性に対して同等の責任と権利を持つことができる。こうして次第に男女互いに相手に対して親愛だけでなく敬意を持つ習慣ができるはずであるというのである。

福沢の儒教倫理批判

さて、こうした提案をしながら、福沢は男尊女卑の悪慣習を理論的に擁護していた儒教倫理を批判している。先にも引用した明治十八年十一月二十日から十二月一日まで時事新報上に連載された『品行論』によると、儒教倫理はそれなりの役割を果たしていたことを認めるが、その本質が全く男女不平等を固定化させる点に問題があると考えて、次のように言う。

「専ら子弟小弱の者の心得を記したるものにして、長上強大を警しむるは甚だ粗なり。子に孝行を教へて父母の義務を説かず、少者に枝を折るの勞を命じて長者にその返報を求めず、少年子弟は常に叱咤せられて長老父兄は嘗て咎めらるゝことなきの大主義にして、其主義の達して男女の關係に現れたる所を視るも亦同じ。男子は強大

にして女子は弱小なるが故に、督責の鋒は常に女子の方に向ひ、之に柔順を教へ、之に謹慎を命じ、交際を禁じ、多言を禁じ、甚だしきは其無学不才にして心事の卑屈なるを悦び、之を目して女の淑徳など、と賞賛して、遂に其大切な教育の方便をも奪い去るに立至り、却て男子の社会を視れば自由安楽、女子に対して毛頭の義務を負わず、強てその義務の在る所を求めば、女子の生命を保存し之に衣食を給する迄に止まり、之を愛するや翫弄の品として愛するのみ。之を親しむや身の辺に近きが故に親しむのみにして、其交際上嘗て一点の敬意を見ず」⁽⁶³⁾

こうして儒教倫理は、目上、年上、親、男子には殆ど義務も制限も与えることなく、ただ弱者、目下、女子に対して服従を教え、柔順を教え、謹慎を命じており、結局男尊女卑の社会体制を擁護する理論になつてしていると批判した。

新しい男女関係と交際論

福沢はこうした儒教倫理に反対し一夫一婦、男女同数同権の道理に基づいて男女が平等に独立の人格として立つ新しい倫理を提案している。明治十九年五月二十六日から六月三日（一八八六）までに亘つて時事新報に連載した『男女交際論』では、明治の新時代に相応しい男女交際のあり方を提案している。

ここでは、最初に男女平等を実現するための男女交際の重要性を指摘する。まず男女の交際には肉体の交わりと情感の交わりという二種類が区別される。肉体の交わりは動物や鳥と同じく肉体的な交わりで

あり、「両生の肉体直接の交」⁽⁶³⁾であると言う。一方情感の交わりとは「双方相互に説を以て交り、文事技芸を以て交り、或は会話し或は同食する等、同生相互の交際に異ならずと雖も、唯其際に微妙不可思議なるは異生相引くの働にして、双方の言語挙動相互に情に感じ、同生の間なれば何の風情もなき事にても、唯異生なるがために之を聞見して快く、一顰一笑の細に至る迄も互に之に触れば千鈞の重きを覺へて、言ふ可らざるの中に無限の情を催ふす（『男女交際論』）」といわれる関係である。これら二種の交際は、互いに「独立して」⁽⁶⁴⁾成立するものと見られてゐる。こうした情感の交わりにおいて、男女は相互に万物の霊として独立で平等の存在とみなし合う関係に至ると彼は考えた。

明治二十一年一月十三日から二十四日（一八八八）までに時事新報に連載した『日本男子論』においては、福沢は夫婦の徳義が百徳の根本であると主張する。そうして社会道徳である公德の美を実現するには、私徳の中心である夫婦の倫理を固めることが基礎作業であると主張した。この夫婦の倫理は親愛と恭敬との二つであると言う（『日本男子論』）⁽⁶⁶⁾。この見解はすでに明治十八年の『日本婦人論』で展開された情交と肉交を男女の中心的な交わりとみなした見解や、⁽⁶⁷⁾『男女交際論』に現れた肉体の交わりと情感の交わりの見解に共通な考え方であった。⁽⁶⁸⁾

第三期の福沢諭吉の女性論

第三期の福沢諭吉の女性論は、福沢の晩年の著作であった明治三十二年四月一日から七月二十三日（一八九九）までに時事新報に連載し

『女大學評論』、『新女大學』に現れる。⁽⁶⁹⁾ここでは、福沢は再び男尊女卑

の社会制度を理論的に正当化していた儒教倫理の代表とみなされた貝原益軒の『女大學』を徹底的に批判している。

既に述べたように『女大學』は貝原益軒自身の著作ではないことが現在では明らかにされている。しかし福沢の時代には益軒の作であると考えられていたのである。この本は徳川時代以来多くの版を重ねて出版されている。

それゆえ『女大學』は、徳川時代から明治時代に掛けて、女性教育のあり方に対して巨大な影響を与えた本だといえることができる。従って、福沢が女性問題に関する儒教倫理を攻撃するのに、これ位攻撃対象として適切な本はないといってよいであろう。

もちろん女性の倫理に関していえば、明治十五年には明治天皇の内示を受けて元田永孚が中心となって高崎正風、仙石政固、児玉源之助と共に編集した『幼学綱要』や、明治十年刊行で近藤芳樹が書いた『明治孝節録』、明治二十年刊行で西村茂樹編集の『婦女鑑』などが出版されており、いずれも儒教倫理を土台としている。しかしいずれも明治天皇や皇后の内示に基づき書籍であったから、福沢が直接攻撃することとはかなりの危険性を伴っていた。従ってそれらの根底にあった儒教倫理の代表として貝原益軒を選び、彼の作と見られていた『女大學』を福沢は取り上げて攻撃批判を行った。そして自分の本はそれと対照的に新しい倫理であるとして『女大學評論』及び『新女大學』という題名にしたのである。前者では今まで福沢が儒教批判をした批判内容

をくり返している。後者では女子の新しい教育を提案しているので、こちらの方を紹介してみよう。

『新女大學』の女子教育

『新女大學』⁽⁷¹⁾では、女子の新しい教育を提案している。今これをぐかい摘んで紹介してみよう。まず女子は男子と同じく父母の教育を得なければならぬから、父母の責任は軽くないのである。父母が協力して教育をすべきであると彼は主張している。

「父たるものは、其苦勞をわかち、仮令戸外の業務あるも、事情の許す限りは時を偷んで小児の養育に助力し、暫くにも妻を休息せしむ可し」、また体育も男子と同じく怪我をしなければ、女子にも「荒き事をも許して遊技せしむ」⁽⁷²⁾るのがよいと言う。

女子に学ばせる学問については、今日家庭科教科目といわれるものは、女子教育の通則として福沢も認めているが、これ以上に女子も男子も相違なく、物理学を土台として諸科専門の研究をさせるのがよいと言っている。しかしながら、福沢は女子教育の限界を次のようにも言うのである。

女子は家の内事を司り小児の哺乳養育を任されているので、学事勉強の暇が少なくなり、生理的にも男子と異なっている。従って金のある女子がさらに専門的な学問に進むのは当然であるが、「学問上に男子と併行す可らざるは自然の約束」⁽⁷³⁾だと言う。こゝら辺に福沢の女性論の限界があるわけで、J・S・ミルと全く違った思想となっている。

さすがにミルは当時の先進国英国の思想家だけあって、女子と男子の性による不平等を全く認めなかったのである。これに対して、福沢は生理学的にも社会的役割の面から見ても、女子の限界を認める発言をここで行っているわけである。

一方、女子がどうしても学ばなければならない学問として、福沢は社会上経済思想と法律思想が必要であると主張し、さらに生理学、医学の基礎的知識を含めた物理的思想が必要だと言ひ、「今の女子をして文明普通の常識を得せしめんと欲するものなり」と主張している。次に結婚生活に入った女性が、夫の両親とどのように接したらよいかが論じられている。これは現代日本でも、嫁と姑の問題としてかなり深刻な問題である。儒教倫理は夫の両親に対して親としての孝養を尽くすべきだといひ、強制的に孝行の徳義を押し付けている。

ところが、福沢は儒教倫理と逆に「夫婦共に父母と離れて別に新家を設くるこそ至当」だといひ、一緒に住まない方がよいと勧める。そして「詰まる所は新旧夫婦相触るゝの点を少なくすること至極の肝要」だと教えている。一方、夫の両親は夫の至尊至親の両親であるから、「保養し其感情を和らげ、不愉快の念を發せしむることなきやう心を用」いることが大事だと教えている。

こうして両親との同居を止め、独立の夫婦単位として相互にその独立の地位を尊重し合わねばならないが、といって夫の両親であるから、子夫婦は両親に対して十分な敬愛を持つべきだと勧めている。

では夫婦相互間については、福沢はどのように勧告しているであらうか。

うか。夫婦は一心同体であるから、苦楽を共にする契約を結んでいるはずである。それゆえ万事において対等の精神でいかなばならないのである。⁽⁷⁸⁾ 女性の柔順といつても「言語拳動の従順にして、卑屈盲従の意味」ではなく、「大節」つまり大事件にあえば「父母の命を拒み、夫の所行に争ふこと」もあると言う。⁽⁷⁹⁾ この「大節」とは、自分の娘を家の経済のために身売りさせたり、夫が不品行で妾を作ったときには、夫は対等の配偶者を侮辱し虐待した罪を犯したわけであるから、妻は死力を尽くして争うべきだというわけである。この本の後で、福沢の談話として載っているものを紹介しておこう。

「女子は仮令ひ博識の大學者足らざるも、人事の大概に通達して、先づ自身の何者たるを知り、其男子に対するの軽重を測り、男女平等不軽不重の原則を明らかにし、内に深く身權を持張して、自尊自重、敢て動揺せざるまでの見識を得せしむるは、子を愛する父母の義務なる可し」⁽⁸⁰⁾

と言っている。

最後に福沢が女性の問題に関して、理想と現実的対応の二重の視点をたえず持っていた点を指摘しておかねばならない。たとえば、男子の不品行が女子に対する侮辱であり虐待であるということを、福沢は力説し男女平等の理想を実現することが「至極の願(『品行論』)」⁽⁸¹⁾であると言ふ。

「本来人の不品行を正さんとすれば、根本より之を正す可し。道二つ、正と不正とのみ……万物の靈として人倫の範圍中に在る者ならば、

断じて醜行を許す可らず、内外表裏一切これを容る、の理なしとて、正々堂々の議論」を張る者を、福沢は正義論者と名づけている。こうした正義論に対して、福沢も自分は同主義だと言うが、これは「至極の願」であつても、現実には行われることができないと言ふのである。⁽⁸⁷⁾

こうした理想が実現されるのは、歳月の掛かる問題であり、早晚実施の目に合うはずだとしているが、明治十八年から二十年代の現実の状況では、理想の実現が不可能であるという認識を持っていた。

従つて福沢は、こうした現実的な状況に適応した現実的対応策を取つていくことが、最後には理想を実現していく適切な手段になると考えた。そこで、明治時代の趨勢の下では、娼婦制度を許さざるを得ないが、いわゆる中産階級の家庭では娼婦や妾がいることを隠しておき、人間交際の内に入れないという次善策を取るべきだとしている。⁽⁸⁴⁾ その結果、次第に理想の男女関係を中産階級の内に実現していき、中産階級の男女が社会をリードして、最後には理想的社会における男女平等を実現できるであらうと考えたのである。

以上福沢の女性論の全体を簡単に概観してきたが、二十世紀後半の日本の男女関係の現状と比べてみると、福沢の女性論の理想的部分は、かなり実現されてきているということが出来る。例えば、夫婦の間の対等の権利関係は、法的には実現しているし、また現実には夫婦の間に第三者の女性や男性が介入する場合、離婚の権利は平等に保証されているといえるであらう。

ただミルのいう男女の理想すなわち職業就職の機会の平等は、たと

え男女の就職の平等についての政府の指導あるにも拘わらず、現在のよな経済的不景気が訪れると、女性の就職が極端に減少するという社会的事実は、ミルの男女平等という理念には程遠いと言わねばならない。

また福沢の家名の廃止の主張は、日本ではまだ実現していないが、結婚後の姓名をどうするかという問題は、現在ジャーナリズムの上で大変問題になってきている。また女性が不動産を男性と同等に持つことが出来ることは、戦後において実現されていると言えよう。

さらに一言付け加えれば、明治時代初期の女性論は、『幼学綱要』『明治孝節録』『婦女鑑』⁽⁸⁵⁾などに展開された男性による女性論が主流を占めており、まだ儒教倫理からそれほど離れていなかったのである。そうした一般的大勢の中で福沢の女性論は儒教倫理を否定して、新しい男女平等のあり方を示そうとした点で、極めて先進的な主張であった。

一方、福沢の女性論は男女の同等を主張したが、職業選択の平等、参政権の平等などを含めた男女の同権を主張したものではなかったという批判もあり、この点は福沢の女性論の時代的限界であるということもできる。そうはいっても、大正期に至つて平塚らいてうの、女性による女性のための女性の解放運動の先駆けとなったと言つても良いであらう。

(本論は筆者が一九九五年六月一日到北京日本学研究中心で講演し、さらに一九九五年七月七日に天津社会科学学院日本研究所において同一テーマで講演した原稿に加筆修正を加えたものである。)

注

- (1) 福沢諭吉『福沢諭吉全集』全二巻、昭和三十三年—三十九年。別巻、昭和四十六年。以下『福沢諭吉全集』を全集と略し、著者名「福沢諭吉」も略す。
- (2) 『西洋事情初編』慶応二年、全集一卷、二七五—三八二頁。
- (3) 『西洋事情外編』明治元年、全集一卷、三八三—四八一頁。
- (4) 『中津留別の書』明治三年、全集二〇巻、四九—五三頁。
- (5) 『学問のすゝめ 一五編』明治九年八月、全集三巻、一二三—一三〇頁。
- (6) 『学問のすゝめ 八編』明治七年四月、全集三巻、七八—八四頁。
- (7) 『学問のすゝめ 一三編』明治七年四月、全集三巻、一〇九—一一五頁。
- (8) 『学問のすゝめ 一五編』明治九年八月、全集三巻、一二三—一三〇頁。
- (9) 第一期から第二期に福澤は主著となるべき女性論を書いていない。もちろん次のような小論は幾つか書いているが、「品行論」の演説を除き重要な論説ではないので、第一期、第二期、第三期と比べて女性論の休止期間とすることができ。
- 男の立場で、結婚する相手の女性の智徳の系統を調べねばならないと主張している「系統論」(明治九年十二月五日、全集一九巻、六〇六—六〇八頁)、女性教育の基礎を家事に置く「女子教育に付き某氏宛発信」(明治十一年二月八日、全集四巻、四九七—四九九頁)、女子の体力を重視すべきだと説く「婦人養生の事」(全集一九巻、六五二—六五四頁)、演説「品行論」(明治十三年七月、妻を娶る条件として智徳の名家を求めることを説く「妾の効能」(全集八巻、一五—一六頁)、妻と妾との区別は「金銭の沙汰」に及ぶかどうかにかかるとする「妻妾区別の説」(全集八巻、三五七—三六一頁)である。
- (10) 『婦女孝行論』明治十六年、全集九巻、二〇七—二二〇頁。
- (11) 『婦女孝行餘論』明治十六年、全集九巻、二二九—二三三頁。
- (12) 『日本婦人論』明治十八年、全集五巻、四四五—四七四頁。
- (13) 『日本婦人論後編』明治十八年、全集五巻、四七五—五〇七頁。
- (14) 『男女交際論』明治十九年、全集五巻、五七九—六〇五頁。
- 『男女交際餘論』明治十九年、全集一一巻、四五—五六頁。
- (15) 『婚姻早晚論』明治十九年、全集二二巻、一五三—一五八頁。
- (16) 『日本男子論』明治二十一年、全集五巻、六〇七—六三九頁。
- (17) 『福翁百話』明治二十八年、全集六巻、一九五—三八四頁。
- (18) 明治二十二年から明治二十七年の女性論休止期間にも、福澤は次のような女性についての幾つかの小論を書いている。福澤の長子一太郎の結婚披露宴の席上で、両親が嫁の系統を調べて一太郎に見合いさせ、最後の結婚の決意は子どもからの自由の決断に委ねた所以を語った「長男一太郎結婚披露の席上に於ける演説」(全集一九巻、明治二十二年四月二十七日、七四—七七一頁)、「賤界に墮落したる」女性に社会一般に対して遠慮すべきだと主張した「貴顕紳士の婦人内室」(全集二三巻、明治二十五年三月九日、三〇八—三一〇頁)、現代から見れば福澤の保守的な女性論を展開している「婦人社会の近状」(全集二三巻、明治二十五年四月二十二日、三四八—三五〇頁)、人世居世の要として女性の裁縫教育を要求する「女子教育」(全集二三巻、明治二十五年十一月十日、五六四—五六六頁)、対外的に対抗できるための国民の体格・体力の向上のために、結婚の際に女性の素性・血統の詮索を怠ってはならないと主張する「国民の体格・配偶の撰択」(全集一四巻、明治二十七年四月七日、三三六—三三九頁)の小論である。
- これらは福澤の第一期、第二期の主張を小出しにしたエッセイに過ぎないので、彼の女性論の休止期間とみなすことができる。
- (19) 『福沢先生浮世談』明治三十一年、全集六巻、四三七—四六〇頁。
- (20) 『女大學評論』明治三十二年、全集六巻、四六一—五〇三頁。
- (21) 『新女大學』明治三十二年、全集六巻、五〇五—五二六頁。
- (22) 『女大學』日本教育文庫、教科書篇日本図書センター、昭和五十二年、一五三—一五四頁。
- (23) 貝原益軒『和俗童子訓』日本教育文庫、学校篇、日本図書センター、昭和五十二年、四三五—五二二頁。
- (24) 中村正直『サムエル・スマイルズ・西国立志篇』明治四年、講談社学術文庫、昭和五十六年。
- (25) 中村正直『J・S・ミル・自由之理』明治五年。
- (26) 高橋昌郎『中村敬宇』人物叢書、吉川弘文館、昭和四十一年。
- 小泉仰『中村敬宇とキリスト教』北樹出版、一九九一年五月。

小泉仰外編著『日本の思想を考える』比較思想学会講座第二巻、北樹出版、一九九三年十月、一一三—一四三頁。

小泉仰「中村敬宇と内村鑑三」『内村鑑三研究第三〇号』キリスト教図書出版社、一九九四年十月、四五—七二頁。

(27) 中村敬宇「善良ナル母ヲ造ルノ論」『明六雜誌』明治文化研究会編『明治文化全集第五巻 雑誌編』日本評論社、昭和四十三年一月、二二—二二三頁。

大久保利謙編『明治啓蒙思想集』筑摩書房、昭和四十二年、三〇〇—三〇二頁。

(28) 元田永学「森文相ニ対スル教育意見書」明治二十年頃、片山清一編『資料・教育勅語——渙発及び関連諸資料』高陵書店、昭和四十九年、七九—八一頁。

原田実「森有礼」『世界思想家全集、牧書店、一九六六年、四七—五六頁。犬塚孝明「若き森有礼——東と西の狭間で」』星雲社、一九八三年、一一—一四二頁。

(29) J. S. Mill, *The Subjection of Women*, 1869, edited by S. Coit, Longmans, London, 1911, p. 58.

(30) 『福沢諭吉選集 第九巻』岩波書店、一九八一年、三〇八—三二〇頁。

(31) 『西洋事情初編 卷之二』全集一卷、三三三頁。

(32) 『学問のすゝめ 初編』全集三巻、二九頁。

(33) 『旧藩情』明治十年、全集七巻、二六一—二八〇頁。

(34) 『中津留別の書』明治三年、全集二〇巻、五〇頁。

(35) 小林勝人訳『孟子上』岩波文庫、昭和四十七年、二〇九—二二一頁。

(36) 『中津留別の書』全集二〇巻、五〇頁。

(37) 上掲書、五一頁。

(38) 『学問のすゝめ 八編』全集三巻、八一—八二頁。

(39) 上掲書、八二頁。

(40) 上掲書、八二頁。

(41) 『学問のすゝめ 一三編』全集三巻、一〇九—一一二頁。福沢はここで「怨望」という言葉を使い、人間の不徳の最大なるものとしている。恐らくこの「怨望」は彼が読んだシルの“On Liberty”の第四章に出づべし“envy”

のことであろう。シルは人間の悪徳を列挙して次のように言い、envyを最も嫌悪すべき反社会的情念であると言っている。

Cruelty of disposition; malice and ill-nature; that most anti-social and odious of all passions, envy; . . . ” J. S. Mill, *Utilitarianism, Liberty, and Representative Government*, New York: E. P. Dutton and Company, INC, 1951, p. 181.

ところが、中村敬宇は彼の訳した『自由之理』明治五年において“that most anti-social and odious of all passions, envy . . .”を「交際ヲ嫌ヒ仇恨ノ情アル事」と訳しているのは、些か誤訳である。この点で、福沢がもしこの箇所から「怨望」という言葉を取ったとすれば、敬宇より正確な訳をしているわけである。そういえば、英語の envy と日本語の怨望とは発音もよく似ていて、福沢はゴロ合わせも楽しんだに違いない。

(42) 『学問のすゝめ 一五編』全集三巻、一二四頁。

(43) J. S. Mill, *The Enfranchisement of Women*, 1851.

(44) J. S. Mill, *Dissertations and Discussions*, vol. 2, Longmans, London, 1875.

(45) F. A. Hayek, *John Stuart Mill and Harriet Taylor*, Routledge & Kegan Paul, London, 1951.

Michael St. J. Packe, *The Life of John Stuart Mill*, Secker & Warburg, London 1954.

Ruth Borchard, *John Stuart Mill the Man*, Watts, London, 1957.

H. O. Pappé, *John Stuart Mill and Harriet Taylor Myth*, Cambridge University Press, 1960.

F. Josephine Kamm, *John Stuart Mill in Love*, Gordon & Bremsen, London, 1977.

ハイエクが最初『女性参政権』をHarriet Taylorの著作であると断定してから、バックも同調していたが、バックはこれに反対して、ハリエットの他の著作と比較して、彼女がこれ程の著作を書けるわけがないと論じ、カムもバックに同意している。どちらが正しいか今後の研究に委ねざるを得ない。そこで、筆者はこの『女性参政権』をシルを論じる際に除外しておく。

(46) Michael St. John Packe, *The Life of John Stuart Mill*, London, Secker & Warburg, 1954, pp. 492-505.

- (47) 小泉仰『ミル』牧書店、昭和三十九年、一一五—一二三頁。
- (48) J. S. Mill, Autobiography of John Stuart Mill, 1873, Columbia University Press, New York, 1960, p. 131; J. S. Mill, Autobiography, edited by Harold Laslett, Oxford University Press, 1931, p. 158.
- (49) 『学問のすゝめ 五編』全集三卷、六一頁。
ここで福沢は彼の言う中産階級が学者のみであるといい、その学者の多数も政府に擦り寄っていると批判している。それゆえ、彼の意味した中産階級は日本に存在していないと見ている。
- (50) 『徳育如何』明治十五年、全集五卷、三三三—三四頁。
福沢はここで将来の指導者を教育する場合、その可能性のある対象が次の三條件を満足する必要があると論じる。「祖先の遺伝の能力と、其生育の家風と、其社会の公議輿論」の三條件を充たす人物は旧来の士族出身であるという。ところで、この士族とは『時事小言』明治十四年（全集五卷、二二二頁）によれば、「封建時代に世禄を食て帯刀したる者のみに限るに非ず。或は浪士、豪農、儒者、医師、文人等、都て其精神を高尙にして肉体以上の事に心身を用る種族を指す」という。
いわば、彼という無形の独立を達成した、あるいは達成しつつある人々を指していた。
- (51) 『品行論』明治十八年、全集五卷、五六六—五六九頁、五七二—五七四頁、五七六—五七七頁。
- (52) 『徳育如何』三五四頁。『時事小言』二二二頁。
- (53) 『日本婦人論』全集五卷、四四五—四七四頁。
- (54) 上掲書、四四九頁。
- (55) 上掲書、四五四頁。
- (56) 上掲書、四五七—四五八頁、四六〇頁。
- (57) 『品行論』全集五卷、五五四頁。
- (58) 上掲書、五四七—五四八頁。
- (59) 『日本婦人論』全集五卷、四六七頁。
- (60) 上掲書、四六八頁。
- (61) 上掲書、四六九—四七一頁。
- (62) 『品行論』全集五卷、五五三—五五四頁。
- (63) 『男女交際論』全集五卷、五八九頁。
- (64) 上掲書、五九〇頁。
- (65) 上掲書、五九〇頁。
- (66) 『日本男子論』明治二十一年、全集五卷、六二二—六二八頁。
- (67) 『日本婦人論』全集五卷、四四七—四七四頁。
- (68) 『男女交際論』五七九—六〇五頁。
- (69) 『女大學評論』明治三十二年、全集六卷、四六一—五〇三頁。
- (70) 『新女大學』明治三十二年、全集六卷、五〇五—五二六頁。
- (71) 上掲書、五〇五—五二六頁。
- (72) 上掲書、五〇五頁。
- (73) 上掲書、五〇七頁。
- (74) 上掲書、五〇七頁。
- (75) 上掲書、五一三頁。
- (76) 上掲書、五一三頁。
- (77) 上掲書、五一四頁。
- (78) 上掲書、五一九—五二〇頁。
- (79) 上掲書、五二〇—五二二頁。
- (80) 上掲書、五二三頁。
- (81) 『品行論』全集五卷、五五五頁。
- (82) 上掲書、五五五頁。
- (83) 上掲書、五五五—五五九頁。
- (84) 上掲書、五五四—五七四頁。
- (85) 元田永孚編『幼学綱要』宮内省、明治十五年、近藤芳樹編『明治孝節録』宮内省、明治十年、西村茂樹編『婦女鑑』宮内省、明治二十年、(海後宗臣編『教育勅語渙発関係資料集第一卷』国民精神文化研究所昭和十五年、二五—六五三頁)
- (86) 中村敏子『福沢諭吉における文明と家族——序説』『北大法学論集』第四〇巻、五・六号、一九九〇、「福沢諭吉における文明と家族(二)」第四四巻、第四号、一九九三、「福沢諭吉における文明と家族(三・完)」第六号、一九九四。